

敷島町文化財調査報告第6集  
(山梨県)

# 金の尾遺跡 V

敷島町菅泉尻団地建設事業に伴う  
弥生・平安時代遺跡の発掘調査報告書

1997

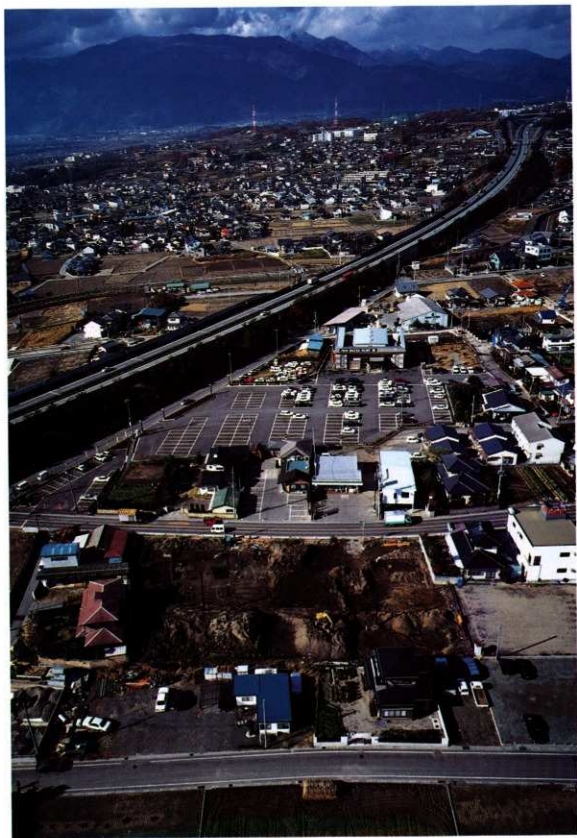
敷島町教育委員会

# 金の尾遺跡 V

敷島町菅泉尻団地建設事業に伴う  
弥生・平安時代遺跡の発掘調査報告書

1997

敷島町教育委員会



遺跡遠景(東より)



豆 棺

## 序 文

昭和52年の金の尾遺跡の発見以来、今回で発掘調査はすでに5回を数え、今年で1度発見20年目にあたります。この間、数回におよぶ調査が行なわれ、多くの成果が得られました。

『金の尾遺跡』は、山梨県における弥生時代の代表遺跡として県内外にその名は広く知られるところとなっております。

今回の発掘調査は、町営泉尻団地の建設事業に先立って行なわれたもので、広大な遺跡範囲の東南部分に位置をし、新たな発見に期待が寄せられました。その結果弥生時代末期と考えられる壺棺が埋葬当時のままで発見をされました。その姿は、大型の壺に笠のような蓋を被せたもので、この形態は本県初例と聞いております。また、発見されました遺構・遺物の多くは平安時代のもので、金の尾一帯が縄文から平安まで脈々と生活が営まれた安定した土地であったことも判明いたしました。今回得られました資料をもとにさらなる研究が進みますことを期待いたします。

遺跡の所在します大下条地区は、現在もっとも開発が進んでいる地域であります。文化財保護と地域開発といった狭間のなか、大切な文化遺産を守り、調和のとれた地域福祉を行なうことが私達に課せられた責務と考えます。

最後に、今回の調査に際しまして、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心からお礼を申し上げ序といたします。

平成9年3月

敷島町教育委員会

教育長 中 込 儀 一



## 例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町天下条に所在する金の尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、町営泉尻団地建設工事に先駆けて行なわれた発掘調査である。
3. 平成8年(1996)5月に試掘調査を行い、この結果を踏まえて発掘調査は、平成8年8月8日より同年11月30日まで行なった。また、平成8年12月より平成9年(1997)3月までの間、整理作業、報告書作成を行なった。
4. 発掘調査にあたった組織は、次のとおりである。

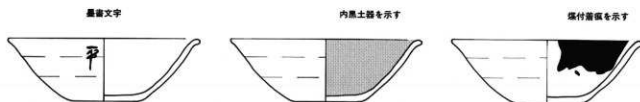
調査主体者	敷島町教育委員会
調査担当者	大嶋正之(敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係)
調査事務局	敷島町役場建設整備課管理係
5. 本書の執筆、編集は大嶋正之が行い、遺物実測、トレース、拓本、図版作成については敷島町文化財調査協力員である飯室、石川、長田、小林、高添、関本の諸氏の協力を得た。遺構、遺物の写真は大嶋が撮影し、遺物の一部を森原明廣氏、遺跡の一部を株式会社フジテクノが行なった。
6. 壺棺の土壌については、株式会社バリノサーベイに委託し、科学分析を行なった。
7. 第4章は、株式会社バリノサーベイによる、分析結果である。
8. 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々、機関よりご指導、ご協力を戴いた。ここにご芳名を記して、厚く謝意を申し上げる。

出月洋文、中山誠二(山梨県教育委員会)、坂本美夫、新津 健、小野正文、森原明廣、保坂和博、笠原みゆき(山梨県埋蔵文化財センター)、末木 健(山梨県立考古博物館)、畑 大介(帝京山梨文化財研究所)、佐野 隆(明野村教育委員会)、井上 勉、県埋蔵文化財センター、山梨県建築住宅課、甲府十木事務所、池谷建材店(順不同、敬称略)
9. 発掘調査、整理作業参加者(敷島町文化財調査協力員)

浅川松子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、尾澤玉枝、小林明美、二枝延子、末松福江、関本芳子、高添美智子、近浦正治、保坂広昭、保延 勇(敬称略)
10. 本遺跡の出土遺物及び、調査で得られたすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

## 凡 例

1. 本報告書の挿図にあるスクリーントーンの内容は以下のとおりである。



2. 遺構平面図中にある・は、遺物出土地点、数字は、土器番号を示す。

## 本文目次

序 文	
はじめに	7
第1章 遺跡をとりまく環境	
1 遺跡の立地と地理的環境	7
2 遺跡周辺の歴史的環境	8
第2章 遺構と遺物	
1 住居跡	11
2 土 坑	18
第3章 遺構外遺物	
1 遺構外遺物 縄文土器	23
2 遺構外遺物 土師器	23
3 遺構外遺物 石器・土製品	24
第4章 壺棺内土壌自然科学分析結果	
1 壺棺の出土状態および試料	29
2 埋納物の検討	29
3 X線回析分析による朱色物質の材質同定	31
第5章 総 括	34



## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	9	第12図	2号十坑出土遺物	19
第2図	遺構配置平面図	10	第13図	3号土坑	19
第3図	1号住居跡	11	第14図	4号上墳墓	20
第4図	1号住居出土遺物	12	第15図	4号上墳墓完掘平面図	20
第5図	2号住居跡	13	第16図	壺棺蓋	20
第6図	2号住居出土遺物	14	第17図	壺棺壺	21
第7図	3号住居跡	15	第18図	4号上墳墓出土壺棺	22
第8図	3号住居出土遺物	17	第19図	遺構外遺物Ⅰ 縄文土器	25
第9図	1号土坑	19	第20図	遺構外遺物Ⅱ 土師器	26
第10図	1号十坑出土遺物	19	第21図	遺構外遺物Ⅲ 土師器	27
第11図	2号土坑	19	第22図	遺構外遺物Ⅳ 土師器・石器・土製品	28

## 表 目 次

第1表	壺棺上墳のリン・カルシウム分析結果表	29
第2表	脂質分析結果表	30
第3表	壺棺中層から検出された赤色物質のX線回折表	32

## 図 版 目 次

原色図版 1	遺 跡 遺 景
原色図版 2	4号土墳墓山上壺棺

図版 1	1号住居跡全景	37
図版 2	1号住居出土遺物	37
図版 3	2号住居跡全景	38
図版 4	2号住居出土遺物	38
図版 5	3号住居跡全景	39
図版 6	3号住居出土遺物	39
図版 7	1～3土坑全景	40
図版 8	4号土墳墓壺棺山上状況	41
図版 9	壺棺蓋	42
図版 10	壺棺壺	42
図版 11	4号土墳墓全景	43
図版 12	遺構外遺物 土師器	44
図版 13	遺構外遺物 土師器	45
図版 14	遺構外遺物 石器・土製品	46
図版 15	線刻・墨書土器	47



# はじめに

敷島町の最南端、JR中央本線電工駅北側一帯に広がる金の尾遺跡については、過去の発掘調査の成果によってその性格が多くの人々に知られている。調査回数はすでに6回を数え、遺跡の時代も縄文前～後期、弥生後期、古墳前期、平安中期の遺構が発見されている。

近年、町南部の市街地において開発に先立つ大規模な発掘・試掘調査が多く行なわれている。この調査の結果、新資料の発見が相次ぎ従来の盆地北西部における歴史認識を再考せざるを得ない状況となっている。従来縄文、弥生とされてきた同遺跡の時代も4次調査によって古墳が、5次調査によって平安の遺構がそれぞれ発見された。このことは、断続的ではあるが各時代の人間の営みが確認されたことによって、この地域が生活をする上で条件の整った場所であったということになる。

金の尾遺跡は、主に弥生時代を代表する遺跡として著名であるが、各時代の遺構が発見されたことによって扇状地における歴史環境の復元も僅かではあるが可能となり、遺跡全体の重要性が益々高くなってきている。

今回の第5次調査は、町営泉尻団地建設に先立って行なわれた発掘調査である。平成8年5月に行なった試掘調査によって縄文土器片や9世紀後半の土師器坏などが出土し、同年8月より11月までの間本調査を行なった。調査面積は約2200㎡、調査された遺構は平安時代中期の住居跡や弥生時代末の上墳などである。特にこの上墳からは、壺に蓋を被せた状態の棺が出土している。

金の尾遺跡は、東西300m、南北400mの広範囲に渡り、且つ、すでに宅地化が進む計画的に調査を行うことが困難な状況にある。このため、調査は開発に伴う事前調査が主で調査箇所は虫食いの状態になってしまう。今回の5次調査は遺跡の東端に位置し標高283mを測る。

## 第1章 遺跡をとりまく環境

### 1. 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の所在する敷島町は、甲府盆地の北西端部に位置し、県都甲府市の西方に隣接する。町域は南北約15km、東西約4kmで、南北に細長い帯状を呈している。町の北部は太刀岡山など茅ヶ岳・黒富士火山によって形成された千m級の山々が点在する山岳地帯である。また、町の南部は奥秩父山系の金峰山に源を持つ荒川によって形成された扇状地帯となっている。町域の北部約8割が川間地帯、南部の約2割が扇状地（一部丘陵地）である。この扇状地上に市街地が広がり、また、多くの遺跡も分布している。

金の尾遺跡は、敷島町東部を南流する荒川によって形成された扇状地の扇中央部に位置し、荒川右岸の自然堤防上に営まれた遺跡である。遺跡西方には敷島、双葉両町にまたがる通尾山に源をもつ小河川の貞川が南流し、遺跡南端において東に流れの向きを要える。また、遺跡の東側には南北に河川の痕跡が認められる。これは過去において数度となく水害を齎した荒川の跡と考えられる。このことから、過去においては、丁度北方を除いた三方を河川に囲まれた状態で遺跡が存在していた時期もあったことになり、地形的に微高地上に形成されていたことがうかがえる。

## 2. 遺跡周辺の歴史的環境（第1図）

遺跡が位置する敷島町は、北部の山間地域と南部の扇状地域に大別できる。南部においては一部黒富士火山等によって形成された台地が南北に延びる。

敷島町が属する中巨摩郡東部は、富士川の左岸に位置する。堤防遺跡として知られる「かすみ堤」が構築される以前は、この川の氾濫によって度重なる災害を受けてきており、遺跡の数も極めて少ない状況である。このなかにあつて敷島町は扇状地の扇頂部分に位置し、尚且つ、町西隣には茅ヶ岳・黒富士火山によって形成された通称赤坂台地があることから富士川による大規模な水害跡はみられず、比較的遺跡の多い地域と言えよう。むしろ町東部を南流する荒川の影響が強くみられる地域である。

金の尾遺跡の範囲は、推定で東西300m、南北400mを測り甲府盆地内に営まれた遺跡としては比較的規模の大きい遺跡である。市街地の中心に位置するため、学術的あるいは大規模開発などによる計画的な調査は困難である。現在までのところ、虫食い状態ではあるが6回にわたって調査が行なわれ徐々に遺跡の全容が判明してきている。便宜上1回目の調査を1次調査とし、調査順に数字を付すこととする。

5次調査地点の南西側において行なった1、3、4次調査では、弥生時代を中心とする規模の大きい集落跡、基跡が発見されている。これまでのところ縄文前期末の十三菩提式期や中期の勝坂期の住居跡や土坑、遺物が、また、弥生時代後期に営まれた集落とこれらに伴うと考えられる周溝墓群が調査され、その数は、住居跡33軒、周溝墓跡26基を数え、山梨県における弥生時代研究の重要な位置をしめる遺跡となっている。

古墳時代に入ると、山梨県では甲府盆地南東部に位置する東八代郡を中心として岡饒子塚古墳など大型の前期古墳が築造される。その後菅根丘陵、笛吹川一帯にかけて多くの古墳が構築され、濃厚な分布が認められる。金の尾遺跡の位置する甲府盆地北西部周辺での古墳の築造は6世紀に入ってからである。遺跡の北東、荒川対岸の甲府市千塚にある6世紀後半の加牟那塚古墳や同市湯村の方寿森古墳など所謂千塚古墳群や遺跡西方には双葉町双葉1号墳や竜上町中秣塚古墳に代表される7世紀前半の赤坂台古墳群が存在する。敷島町はこれら古墳群の中心に位置するが、田畑の開墾整備などによって数基の古墳が消滅し、現在は2基の円墳が残るだけとなっている。

この時期の集落遺跡としては、遺跡北方約500mの御岳田遺跡、北東約800mの松ノ尾遺跡があげられる。御岳田遺跡は古墳前期、松ノ尾遺跡は古墳後期の集落であるが、両遺跡とも小規模なものである。

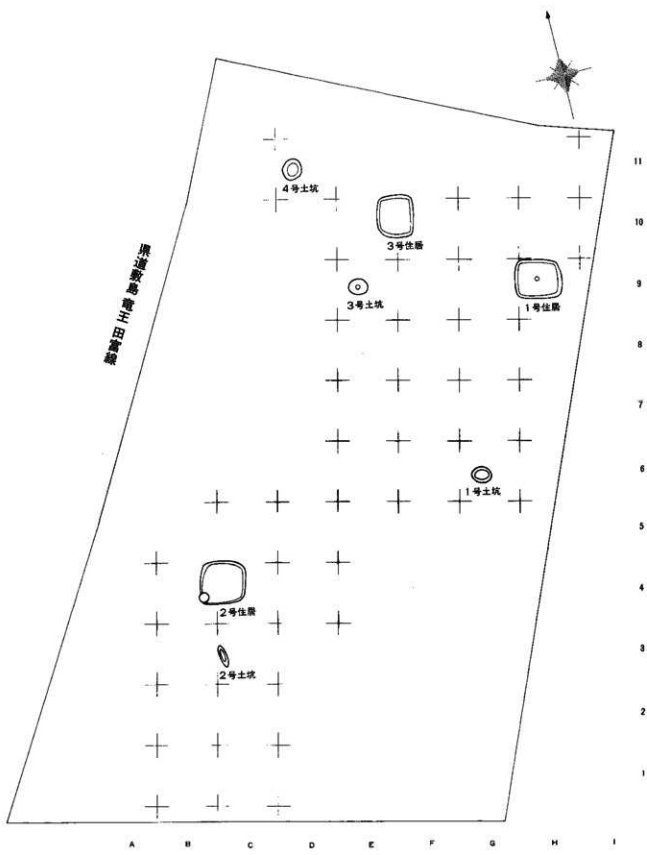
遺跡の北西約2、2kmには県内最古の窯跡として著名な天狗沢瓦窯跡が存在する。7世紀後半に位置付けられる3基の登り窯を有し、県内初見の意匠を持つ中房蓮子1+6の素縁、有段縁2種の素弁八葉蓮華文體瓦や男、女瓦などが出土し、本県古代史上重要な遺跡である。現在までのところ需要先である遺跡は発見されていない。

遺跡北東約800mにある松ノ尾遺跡は平安時代前期後半から後期を中心とする集落遺跡である。これまでのところ古墳後期住居跡5軒、平安中、後期住居跡12軒が発見され、空白であった盆地北西部の平安時代史に好資料を提示する遺跡となった。また、本遺跡からは県内初例の11世紀末から12世紀のものと考えられる銅製阿弥陀如来坐像が2軀出土し、内1軀には鍍金が施されていた。この地域は、鎌倉時代に京都松尾大社の荘園であったことが古文書に記されており、時代背景的なことから、この仏像も荘園領主に関係する遺物と考えられる。

金の尾遺跡周辺は以上のように山梨県史における各時代の重要遺跡が点在する特異な地域といえよう。



- 金の尾遺跡推定範囲
 F 八幡遺跡(竜王町)
- A 金の尾遺跡第5次調査地点
 G 元免許遺跡(竜王町)
- B 御岳田遺跡
 H 往生塚古墳(双葉町)
- C 松ノ尾遺跡
 1/10,000
- D 天狗沢瓦窯跡
 第1図 遺跡位置図
- E 大庭古墳



第2圖 遺構配置平面圖

## 第2章 遺構と遺物

### 1 住居跡

金の尾遺跡における遺構は、住居と土坑とに大別できる。住居軒数は3軒で、すべて平安時代中期、10世紀第1、2四半期に位置付けられるものである。

#### 1号住居跡（第3図、図版1）

**位置・概要** 本住居跡は、H-9グリットに位置する。住宅浄化槽によって住居の南東コーナーは壊されていた。遺跡も含め周辺地域は、夏季の間地下水が高くなるため遺構内堆積上には砂粒、雲母、2mm前後の小石が多く香取された。

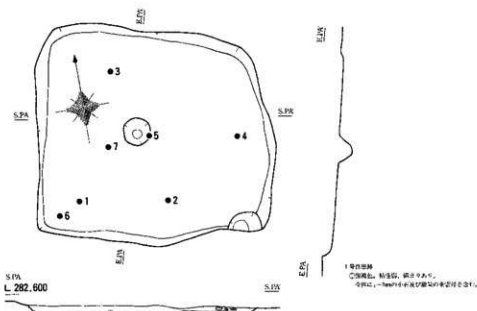
**形状・規模** 平面形は東西3.5m、南北3.2mの方形を呈す。壁の残りは悪く、現存からでは緩やかに立ち上がると思われ、高さは平均10cmを測る。住居中央に直径40cm、深さ25cmの穴跡がある。四方の柱穴は発見されていないため中央の穴が柱穴であるかは不明である。

**カマド** 調査の結果、住居南東部分において堆積上中より若干の焼土が確認されたがカマド施設は認められなかった。住居南東コーナーにおいて破壊された箇所があるため東壁南側に設けられた可能性も考えられる。

**遺物** 1は土師器坏で、口径11.4cm、器高4.3cm、底径5.3cmを測る。胎土はキメ細かく、緻密で全体に赤色粒子、少量の雲母を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で体部内面に横方向の暗文、体部外面下半に斜めへら削りを施す。底部は糸切り後、へら削りをし、更に「井」の線刻が有る。

2は土師器坏で、推定口径11cm、器高3.85cm、底径5.5cmを測る。胎土はキメ細かく、赤色粒子を含む。色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で、内面に放射状暗文、口辺部は横ナデ仕上げ、体部外面下半は斜めへら削り、底部はへら成形である。

3は土師器坏で、推定口径13.2cm、器高5.4cm、推定底径7.3cmを測る。胎土はキメ細かく、赤色粒子を含み、長石を少量含む。色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で横ナデ仕上げを行なった後、内面に放射状暗文を施す。底部に墨書痕有り。



第3図 1号住居跡

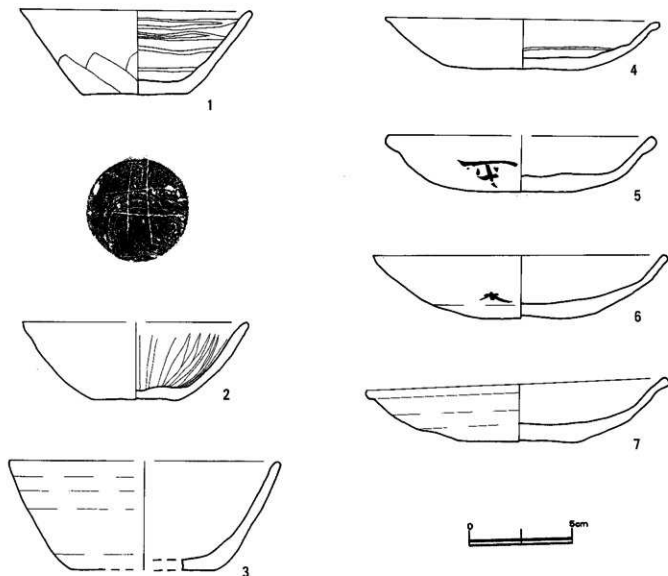
4は土師器皿で、口径13.5cm、器高2.5cm、底径6cmを測る。胎土はキメ細かく、赤色粒子、小石を含む。茶褐色を呈し、焼成は良好で、内面に横方向の暗文が打り、内面体部に段を持つ。

5は土師器皿で、推定口径12.8cm、器高2.8cm、底径5.2cmを測る。胎土はキメ細かく、赤色粒子、小石を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で内面に横方向の暗文が施される。口辺部は厚みを持ち、外面体部下半に帯状のへら削り有り。外面体部に「平」の墨書がある。

6は土師器皿で、口径14.4cm、器高3.2cm、底径4.5cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、赤色粒子を含む。色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で、内面に渦巻き状暗文が施され外面体部下半にへら削りが一周する。体部に「粟」もしくは「粟」とも読める墨書が有る。(註1)

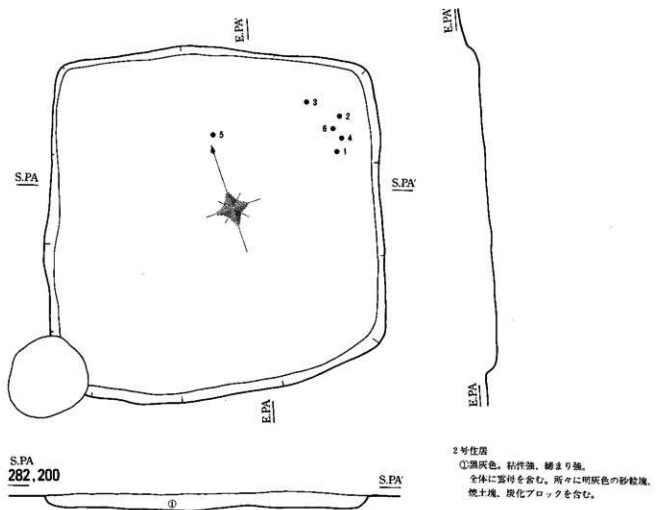
7は土師器皿で、口径14.8cm、器高3.2cm、底径6cmを測る。胎土はキメ細かく赤色粒子、小石を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好、口縁部は横ナデ仕上げで、外面下半にへら削りが一周する。

時期 土器などから10世紀第2四半期。

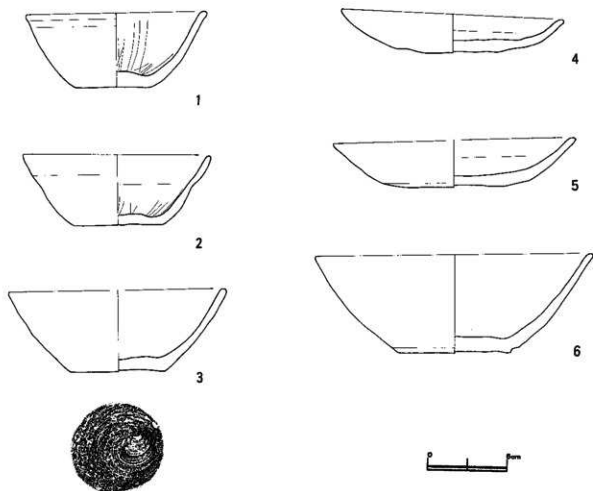


第4図 1号住居跡出土遺物





第5図 2号住居跡



第6図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡 (第5図、図版3)

**位置・概要** 本住居跡は、B-4、C-4グリットにまたがって位置する。1号住居跡と同じく堆積土には雲母、砂粒が多く含まれ、一部に明灰色の砂粒塊を含む。南西コーナーは円形に攪乱されている。遺物は住居北東部において集中して出土している。

**形状・規模** 平面形は東西3.2m、南北3.4mを測り、方形を呈す。壁は平均13cmを測り、1号住居同様残りは良くない。柱穴は確認されなかった。

**カマド** 住居北東部の堆積土中に比較的広範囲にわたって焼土は認められたが、カマドは確認されなかった。上器の出土状況や焼土のことから、東壁北側にあった可能性も考えられる。

**遺物** 1は土師器杯である。口径11cm、器高4.7cm、底径4.9cmを測り、胎土はキメ細かく緻密で、少量の赤色粒子を含む。色調は淡茶褐色で、焼成は良好である。内面に放射状暗文、体部の下半に斜めへう削りが認められる。

2は土師器杯である。口径11.5cm、器高4.3cm、底径5.5cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、少量の赤色粒子を含む。色調は淡茶褐色を呈す。焼成はややあまい。内面に放射状暗文、口縁にかけて横ナデ仕上げ、外面体部下半に斜めへう削りが認められる。

3は土師器杯である。推定口径13.2cm、器高5.1cm、底径5.8cmを測り、胎土はキメがやや粗く、赤色粒子を含む。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。内面底部はやや剥離が目立ち、口辺

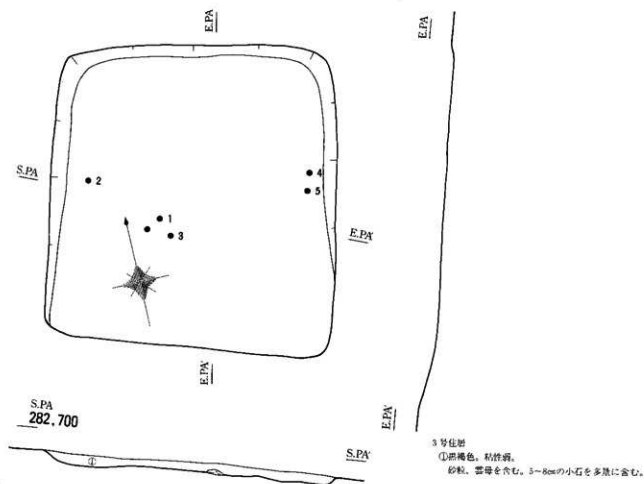
部は横ナデ仕上げ、外面体部下半は斜めへら削りが施される。

4は土師器皿で、口径13.7cm、器高2cm、底径4.8cmを測る。胎土はキメやや粗く、長石を少量含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。内面体部から口辺部にかけて凹段を有し、外面下半にへら削りが一周する。

5は土師器皿で、推定口径14.8cm、器高3.1cm、底径6.2cmを測る。胎土はキメ細かく、色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で、口辺部は横ナデ仕上げが看取できる。外面下半にへら削りが一周する。

6は土師器鉢である。口径17.1cm、器高6.3cm、底径7.1cmを測り、胎土はキメ粗く、赤色粒子、雲母を含む。色調は、外面茶褐色、内面淡茶を呈し、焼成は良好である。内面に放射状暗文、底部に削り出し高台が有り、ロクロ回転は右。

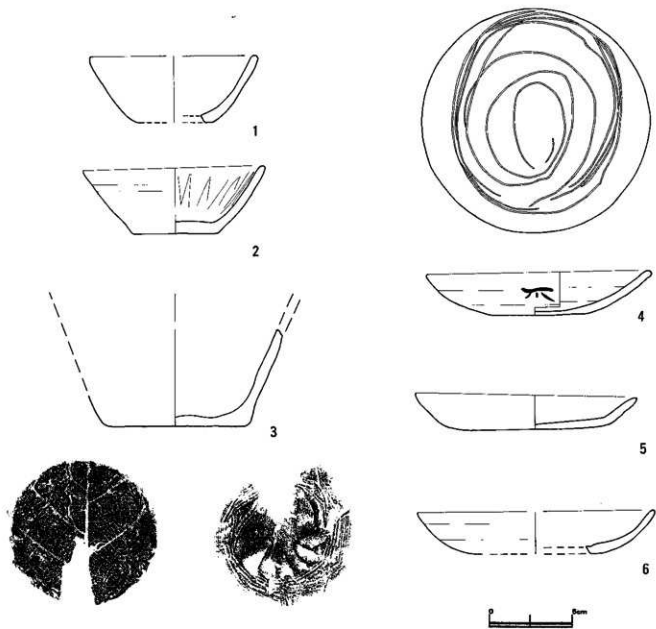
時期 土器などから、10世紀第2四半期と考えられる。



第7図 3号住居跡

### 3号住居跡（第7図、図版5）

- 位置・概要** 3号住居跡は、グリットE-10、F-10にまたがって位置する。堆積土は砂粒、5～8cmの小石を多く含む、雲母を少量含む。調査区北側の1号住居西隣に位置する。
- 形状・規模** 平面形は東西2.9m、南北3.1mの方形を呈す。壁は1、2号住居同様残りは悪く、高さは平均10cmで、北壁にいたっては傾か4cmを残すだけとなっている。柱穴は確認されなかった。
- カマド** 住居北東壁付近において、覆土中に約50cm四方にわたり焼土が発見されたが、カマドは確認されなかった。この焼土付近にカマドが設けられていた可能性が考えられる。
- 遺物**
- 1は土師器坏である。推定口径10.2cm、器高4.1cm、推定底径4.6cmを測り胎土はキメ細かく緻密で、赤色粒子が少量含まれる。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で、内面に放射状暗文が施される。
  - 2は土師器坏である。口径11.1cm、器高4.1cm、底径5.3cmを測り、胎土は体部から底部にかけてキメ粗く、雲母を少量含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好である。内面に放射状暗文、口辺部は横ナデ仕上げが認められる。また、一部口辺から口縁部にかけて、煤痕が看取される。
  - 3は土師器甕の底部である。底径8.7cmを測り、口径、器高については不明である。胎土はキメ粗く、金雲母を多く含む。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好。内面に横方向のハケ目があり、ヘラによると思われる成形痕が看取される。底部に木炭痕有り。
  - 4は土師器皿で、口径13.5cm、器高2.7cm、底径5.6cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、赤色粒子、雲母を少量含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。内面に渦巻き状暗文を施し、口辺部は横ナデ仕上げ、外面下半にロクロ回転による帯状ヘラ削り、口辺部に「六」の墨書がある。
  - 5は土師器皿で、口径13.3cm、器高2.35cm、底径9.5cmを測る。胎土はキメ粗く、微量に金雲母を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良。
  - 6は土師器皿で、推定口径14.4cm、器高2.55cm、推定底径7.8cmを測る。胎土はキメ細かく、赤色粒子が含まれる。色調は淡茶色を呈し、焼成は良好、口辺部は横ナデ仕上げ、内面体部から見込み部はヘラ磨きが看取される。
- 時期** 土器などから10世紀第1四半期。



第8图 3号住居跡出土遺物

## 2 上 坑

### 1号土坑 (第9図、図版7)

- 位置・概要** 1号土坑は、G-6グリットに位置する。堆積土層は3層からなり、いずれも砂粒を多く含み、全雲母を少量含む。住居跡同様地下水等の影響を受けている。
- 形状・規模** 長形1.5m、短形1.3mのほぼ円形を呈し、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
- 遺物** 1は土師器壺の底部で、底径8.1cmを測る。胎土はキメ細かく石英、全雲母、長石を多く含み、色調は灰茶色を呈す。焼成は良で内面にハケ目、底部に貼付けの台を持つ。
- 2は土師器壺又は、甕の体部である。キメ粗く、色調は外面灰褐色、内面茶褐色で小石、長石を含む。焼成は良で内面にハケ目、外面剝離面より輪積痕が看取できる。
- 時期** 明確にはできないが、土器から古墳時代と考えられる。

### 2号土坑 (第10図、図版7)

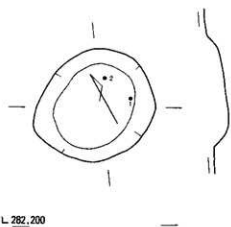
- 位置・概要** 2号土坑は、G-3グリットに位置する。堆積土層は2層からなり、1号土坑と同じく砂粒網である。遺構時期は不明。
- 形状・規模** 長径1.8m、短径0.6mの長方形を呈し、深さ46cmを測る。底面は平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。
- 遺物** 土師器甕の口縁と考えられる。推定口径18.5cm、小石を含み、暗茶色を呈す。焼成は良で、全体に磨きが施される。

### 3号土坑 (第11図、図版7)

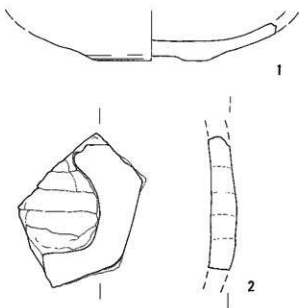
- 位置・概要** 3号土坑は、E-9グリットに位置する。堆積土層は2層からなり砂粒、雲母を多く含む層である。遺物は出土せず、時代は不明。
- 形状・規模** 長径1.6m、短径1.4mの円形を呈し、深さ40cmを測る。底面は弧状で、壁は緩やかに立ち上がる。

### 4号土墳墓 (第12図、図版11)

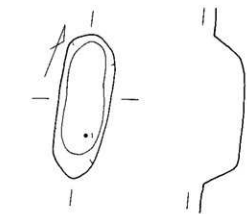
- 位置・概要** 4号土墳は、D-11グリットに位置する。堆積土は1層で、砂粒、雲母を含む。周辺は15cm前後の花崗岩の礫層を含む黄色砂粒層で、遺構はこの層を掘深めて造られている。壺棺は土塚のほぼ中心部に立位の状態で埋葬されていた。
- 形状・規模** 長径1.6m、短径1.5mの円形を呈し、深さ56cmを測る大型の土塚である。底面は弧状で、壁はやや角度をもって立ち上がる。
- 遺物** 本土塚からは状態の良い壺棺が出土した。壺棺は口縁を欠いた大型の壺に蓋を被せた立位の状態で土塚中心部より出している。
- 壺** 土師器で頸部より上部を欠損しているが、欠損部分の値は径21cm、器高46.8cm、底径14.7cm、最大径は体(胴)部にあり、45cmを測る。胎土はキメ粗く、砂粒、小石を多く含み、色調は茶褐色を呈す。内面全体に横方向のハケ目が施される。
- 蓋** 蓋は、専用に作られたものではなく、土師器壺もしくは甕の底部から体(胴)部にかけてやや立ち上がった部分を欠いて、蓋に転用したものである。このため底部が蓋の上面になる。計測、説明部位の表現は壺の名称を用いる。
- 底径19.6cm、器高(底部から欠損部まで)11.2cm、欠損部径44cmを測る。胎土はキメ粗く、砂粒、小石を多く含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。外面体部下方に縦方向のハケ目、内面



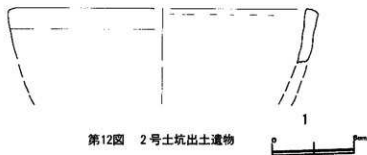
第9图 1号土坑



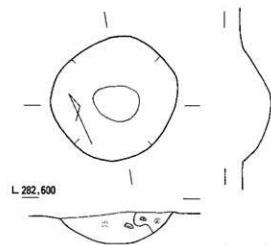
第10图 1号土坑出土遺物



第11图 2号土坑



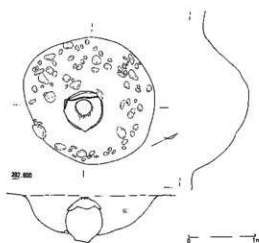
第12图 2号土坑出土遺物



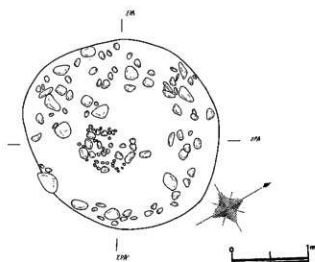
第13图 3号土坑

各土坑 土層説明

- 1号土坑  
 ①褐色、粘土、締まり強。  
 ②紫色、粘土、締まり強。  
 ③赤、土層厚を多く含む。  
 ④褐色、粘土、締まり強。  
 砂较多く、骨器等を少量含む。
- 2号土坑  
 ①褐色、粘土、締まりあり。  
 全体に砂较多含む。  
 ②褐色、粘土、締まり強。  
 黄土を少量含む。
- 3号土坑  
 ①山紫色、粘土、締まり強。  
 砂较多、骨器、土器を含む。  
 ②赤褐色土、粘土、締まり強。  
 砂较多及び2-3cmの小石を少量含む。
- 4号土坑  
 ①褐色、粘土、締まり強。  
 砂较多、骨器を含む。  
 5-20cmの硬い全体に含む。



第14図 4号土墳墓



第15図 4号土墳墓完掘平面図

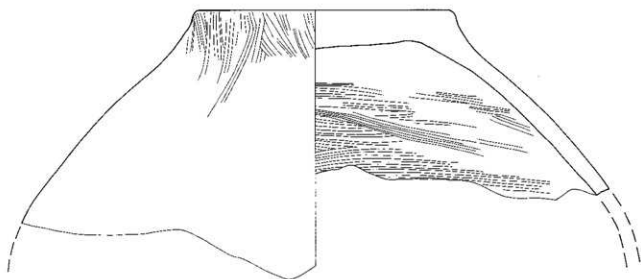
時期  
壺棺

に横方向のハケ目、底部はナデ仕上げが施される。

安定を保つために、壺棺の下には径7cm前後の小石が直径10cmの円形状に敷き詰められていた。

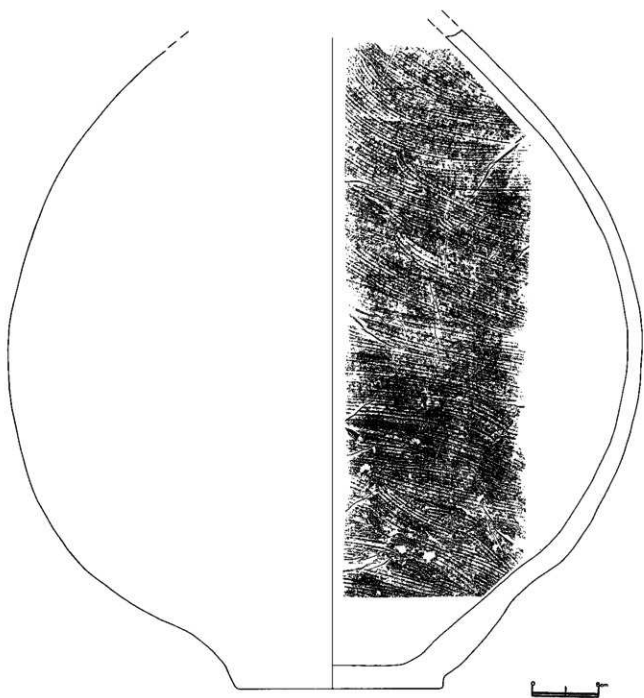
弥生時代末

壺本体と蓋との間には、一部約2.5cmの隙間がある。この隙間は土によって覆われ、その他は密着した状態であった。棺内部は約7cmの厚さに土が堆積していた。堆積土を上中下の各層に分けて観察すると、上層は1~1.5cmの玉状になった土が覆い、中層では土塊が1mm前後の粒子となり、下層部に至り、土は微粒となり、金堂母が少量看取された。また、中層から下層にかけて、骨片と思われる物質を検出した。また、壺胴部内面には、朱色の微砂粒状物質が看取された。土壌については、リン酸カルシウム、脂肪酸分析を行い、朱色砂粒状物質についても化学分析をおこなった。詳細は第4章自然科学分析結果を参照されたい。

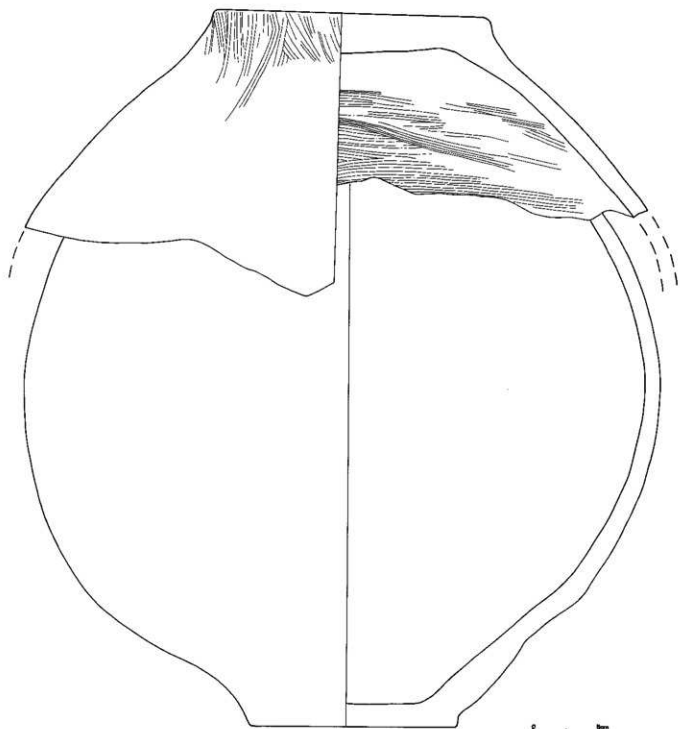


第16図 壺棺蓋





第17圖 壺 槍 壺



第18图 4号土坑墓出土木棺

### 第3章 遺構外遺物

金の地縄跡5次調査においては、遺構に伴わない遺物が比較的多く出土した。その大部分は、調査区西側のA～Cグリット1～6からである。

#### 1 遺構外遺物 縄文土器 (第19図)

主に調査区南側より出土した。大部分が中期扇形式の上器と思われる。

1、4、12は逆八字に沈線文。2は無筋縄文、5は薄手で縄文、7は上字文先端が渦巻き状となる。10は皿形土器。

#### 2 遺構外遺物 土師器 (第20～22図、図版12.13)

1は土師器環で、口径10.6cm、器高4.5cm、底径5cmを測る。胎土はキメ細かく長石を少量含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。内面に放射状暗文が施され、外面体部に対をなす形で「平」の墨書が逆位で書かれている。底部静止糸きり痕有り。9世紀末 B-3グリット

2は土師器環で、推定口径10.6cm、器高3.8cm、推定底径5cmを測る。キメ細かく緻密。色調は外面茶褐色、内面淡灰茶色を呈す。焼成は良好で口辺部は横ナデ仕上げ、外面体部下半は斜めヘラ削りが施される。9世紀末 A-2グリット

3は土師器環で、口径10.8cm、器高4.2cm、底径5cmを測る。キメ細かいが若干砂粒子が目立つ。赤色粒子を少量含む。色調は外面茶褐色、内面淡茶褐色で焼成良好。内面放射状暗文、口辺部横ナデ仕上げ、外面体部下半に斜めヘラ削りが認められる。9世紀末 A-2グリット

4は土師器環で、口径11cm、器高4.7cm、底径5.5cmを測る。キメ細かく緻密で、色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で、内面に薄く放射状暗文、口辺部横ナデ仕上げ、外面体部下半に斜めヘラ削りが認められる。底部糸きり後、調整によるヘラ削りが認められる。9世紀末 A-3グリット

5は土師器環で、推定口径11.2cm、器高4.2cm、底径5.4cmを測る。キメ細かく緻密で、赤色粒子を少量含む。色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で、内面に放射状暗文、体部下半まで横ナデ仕上げ後、外面口辺部より体部下半までヘラ削り。底部糸きり後調整によるヘラ削り有り。9世紀末 A-4グリット

6は土師器環で、口径10.4cm、器高3.9cm、底径5.1cmを測る。キメ細かく緻密で、赤色粒子を多く含む。色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で、内面に放射状暗文、横ナデ仕上げ、外面体部下半にヘラ削り。口縁部内面に灯明痕有り。底部は糸切り後調整によるヘラ削り。9世紀末 A-4グリット

7は土師器皿で、口径14cm、器高2.8cm、底径5.7cmを測る。キメ細かく、焼成は良好。色調は明茶褐色で、内面に渦巻き状暗文、内面体部から口辺部にかけて凹段有り。外面下半部にロクロ回転による帯状ヘラ削り有り。10世紀初頭

8は土師器皿で、推定口径13.6cm、器高2.85cm、推定底径5cmを測る。キメやや粗く、焼成は良好である。色調は暗茶褐色を呈し、内面に渦巻き状と思われる暗文有り。口辺部は横ナデによる仕上げが施される。10世紀初頭 A-4グリット

9は土師器器口縁である。推定口径14.8cmでキメ細かく緻密で、焼成良好である。色調は茶褐色(一部暗茶褐色)を呈し、内面体部に横方向のクシ目有り。B-3グリット

10は土師器環で、推定口径11cm、器高4cm、底径5.1cmを測る。キメ細かく、焼成は良好。色調は茶褐色を呈し、内面に渦巻き状暗文、横ナデ仕上げで外面体部下半に斜めヘラ削り。底部糸切り後、調整によるヘラ削り。9世紀末 B-4グリット

11は土師器皿で、推定口径13.8cm、器高2.7cm、推定底径4.6cmを測る。キメ細かく焼成は良好。色調は茶褐色、外面は何らかの液体の付着が見られ、焦茶褐色を呈す。横ナデ仕上げ、内面渦巻き状暗文有り。 10世紀初頭 B-5グリット

12は土師器杯で、推定口径11.8cm、器高4.3cm、推定底径5.6cmである。キメやや細かく小石、長石を少量含む。焼成は良好、色調は淡茶褐色を呈す。 10世紀代 B-6グリット

13は土師器杯で、口径12.6cm、器高4.5cm、底径5.4cmを測る。キメ粗く小石、長石を含む。焼成は良好で色調は外面淡茶褐色、内面黒色を呈す。内黒土器で、内面放射状暗文、ナデ仕上げ、底部糸切りで「八」の墨書有り。 9世紀末 B-4グリット

14は土師器皿で、口径12.5cm、器高2.85cm、底径5cmを測る。キメ細かく、赤色粒子を含む。焼成は良好で、色調は明茶褐色を呈す。内面に渦巻き状と思われる暗文が施され、ナデ仕上げで、外面下半部にクロロ回転による帯状へら削り有り。外面体部に正位で「人」の墨書有り。 10世紀代 B-6グリット

15は土師器皿で、口径13.1cm、器高2.7cm、底径4cmを測る。キメはやや粗く、長石を多く含む。焼成良好で、色調は暗茶褐色を呈す。内面にかすかに渦巻き状暗文が看取され、ナデ仕上げで、外面下半部に帯状にへら削りが見られる。

16は土師器耳状皿である。器高1.7cmでキメ細かく、赤色粒子を多く含む。焼成は良好で色調は黄褐色を呈す。平安時代 B-6グリット

17は土師器杯で、推定口径16.2cm、器高5.7cm、推定底径6.4cmである。キメ細かく小石を少量含む。焼成は良好で、色調は内面黒色、外面淡茶褐色を呈す。内黒土器で、内面に放射状暗文が見られる。 B-6グリット

18は縄文の深鉢型土器底部で、底径11.3cmを測る。キメ粗く、小石、長石、石英を多く含む。内面茶褐色、外面暗灰色を呈し、底部に縄文有り。 B-6グリット

19は土師器小型甕で、推定口径14.8cmである。キメ粗く、長石、石英を含む。焼成は良で、色調は焦茶色を呈す。内面体部に横方向のハケ目、外面体部に縦方向のハケ目有り。 B-6グリット

20は土師器の丸型土器で、推定口径12cmを測る。キメ細かく緻密で焼成は良好。色調は茶褐色を呈し、外面体部に斜めクシ目、内面へら磨き有り。 G-6グリット

21は土師器杯で、口径10.1cm、器高4.15cm、底径5.5cmを測る。キメ細かく緻密で、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し、内面に放射状暗文、ナデ仕上げで外面下半部に斜めへら削りが施される。底部に「九」の墨書有り。底部静止糸切りで、クロロ回転方向は右。 9世紀末 H-9グリット

22は土師器杯で、口径13.6cm、器高4.1cm、底径5.2cmを測る。キメやや粗く、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し、内面に放射状暗文が施され、口辺部ナデ仕上げである。 H-9グリット

23は土師器鉢で、口径16cm、器高6cm、底径8cmを測る。キメやや粗く焼成は良好で、色調は茶褐色を呈す。底部に削り出し高台有り。10世紀前半 H-9グリット

24は土師器鉢で、色調は茶褐色を呈し、内面に放射状暗文が施され、11線部に 部灯明煤の痕跡が看取される。底部に削り出し高台有り。 H-9グリット

### 3 遺構外遺物 石器・土製品 (第22図、図版14)

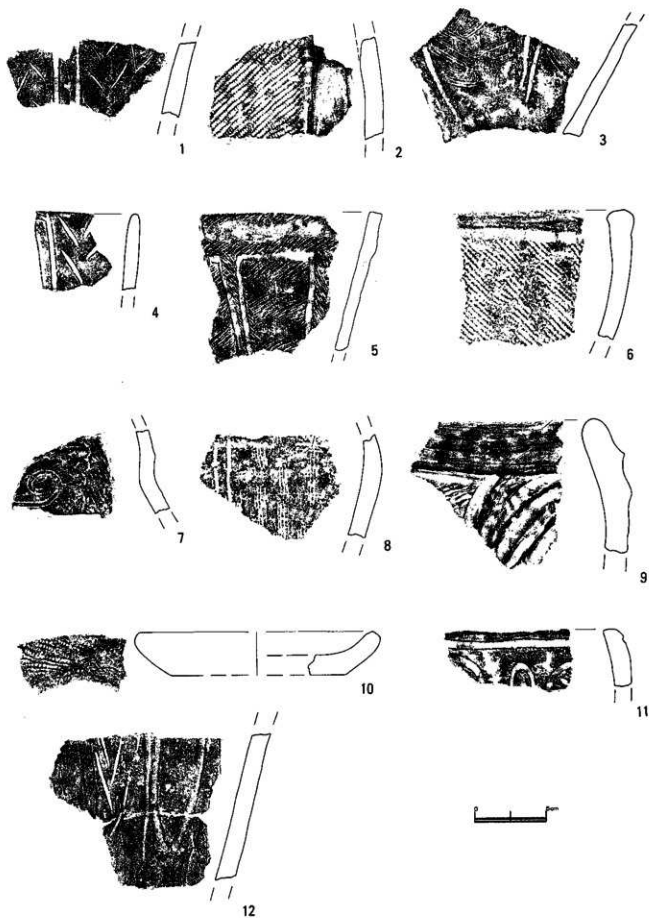
25は打製石斧である。材質は片岩で重さ354g 縄文時代 A-3グリット

26は土製品。長径3.4cm、短径3.1cm、厚さ2cmを測る。遺物表面中央部に「〇」印が5個、その周囲に「×」印を5個運らす文様が施される。この反対面には文様がないため、文様がある方を表、無い方を裏と表記する。色調は表面が茶褐色、裏面が焦茶色を呈す。遺物中央に穿孔を持つ。裏面が一部剥離している。 曾利式期 A-1グリット

27は石鏃。チャート製 無茎鏃 H-9グリット

28は石鏃。黒曜石製 無茎鏃 II-7グリット

29は土製紡錘車。長径3.2cm、短径3cm、厚さ0.6cmを測る。キメ細かく、焼成はやや不良。色調は明茶褐色を呈し、中央部に穿孔を持つ。 A-1グリット



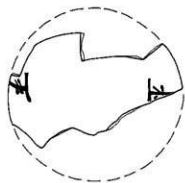
第19圖 遺構外遺物 I・縄文土器



1



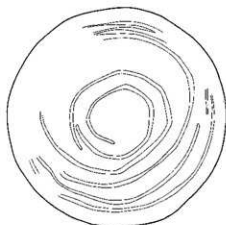
6



2



3



4



7



5



8



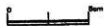
9



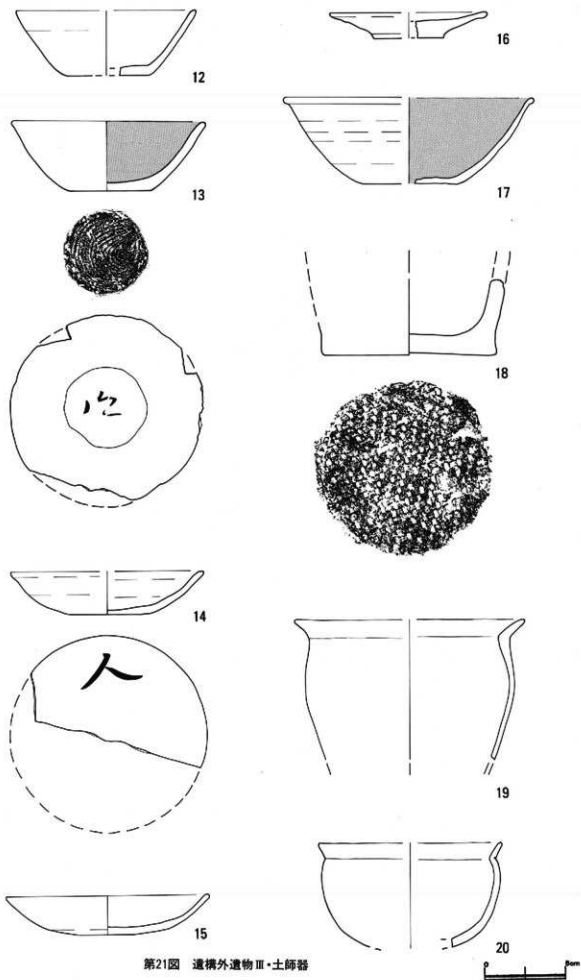
10



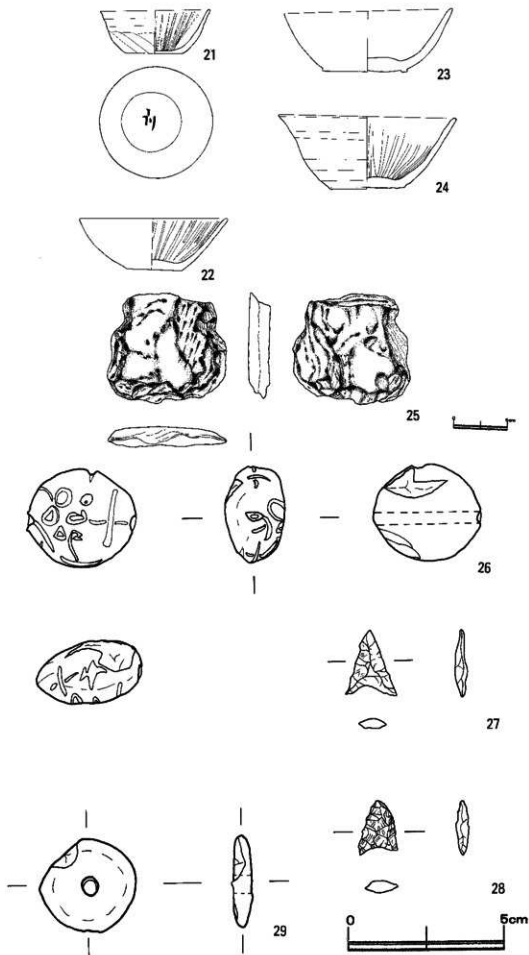
11



第20図 遺構外遺物Ⅱ・土師器



第21圖 遠橋外遺物Ⅲ・土師器



第22圖 遺構外遺物IV・土師器、石器、土製品



## 第4章 壺棺内土壌自然科学分析結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

金の尾遺跡は、縄文時代後期・弥生時代前期・古墳時代前期・平安時代中・後期の住居が確認され、特に弥生時代の集落は山梨県でも最大規模である。第5次調査では、弥生時代末期の壺棺が出土した。壺棺内からは骨片と考えられる遺物が出土しているが、人骨か否かは不明である。また土壌および周囲の上層土壌について、脂肪酸分析およびリン・カルシウム分析を行い、遺体埋納の可能性を検討する。また、壺棺内面から出土した朱色の砂粒状物質について、X線回折分析を行い、その材質を明らかにする。

### 1. 壺棺の出土状態および試料

壺棺が設置されている土壌の規模は、東西・南北ともに150cm、深さ約56cmであり、黒褐色土により覆われている。壺棺は、高さ約47cm、口径21cm、体部最大径約45cmで、蓋によって密閉された状態で出土している。蓋は欠損した蓋もしくは蓋の底部を転用している。壺内には上層が約7cm堆積している。土壌試料は、壺内に堆積土壌を上・中・下層に均等割りして採取された3点と、対称試料として壺棺外側より採取された3点である。また、壺棺内面から出土した朱色の砂粒状物質は別途採取されている。

### 2. 埋納物の検討

#### 2-1. リン・カルシウム分析

##### (1) 試料

試料は、壺棺内および周囲から採取された土壌試料6点である。各試料の詳細は、分析結果と共に第1表に記した。

##### (2) 方法

土壌標準分析・測定法委員会編(1986)、土壌養分測定法委員会編(1981)、京都大学農学部農芸化学教室編(1957)などを参考に以下に示す操作行程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾上あたりのリン酸含量(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

##### (3) 結果

リン・カルシウム分析結果を第1表に示す。リン酸・カルシウム含量とも、壺棺内部で最も高い値が得られた。壺棺内では、上層が最も高い値が得られている。

一方、壺棺の外部で採取された土壌試料では、外側の土器片付近から採取された試料で内部の分析値に近い値が得られている。

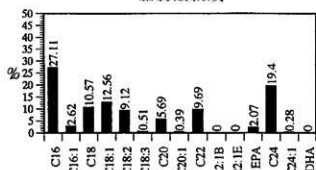
壺棺の外部で採取された土壌試料の分析値は、壺棺から離れたにしたがい低くなる。

第1表 壺棺土壌のリン・カルシウム分析結果表

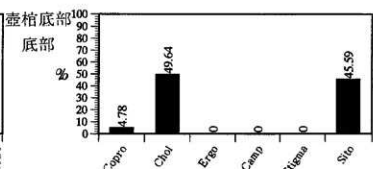
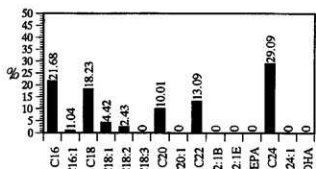
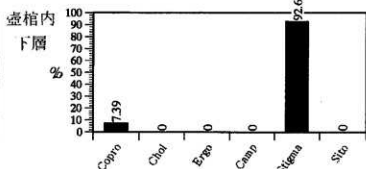
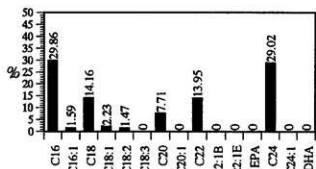
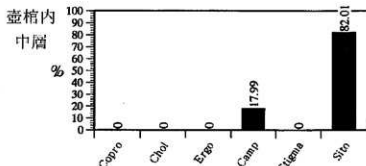
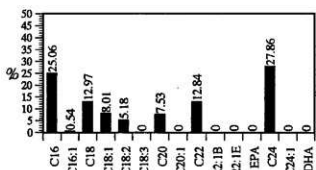
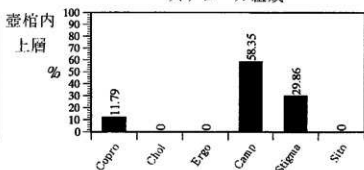
試料採取位岡	リン酸	カルシウム
	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> mg/g	CaOmg/g
壺棺上層	3.93	5.34
壺棺中層	3.32	4.84
壺棺下層	3.75	4.94
壺棺外側土器片付近	2.94	4.75
壺棺底部	2.09	3.93
壺底面	1.80	3.97

注) リン酸、カルシウムともに乾上あたり

脂肪酸組成



ステロール組成



第2表 脂質分析結果表

## 2-2. 脂質分析

### (1) 試料

試料は、壺棺内および壺棺底部から採取された土壌試料4点である。

### (2) 方法

定法(坂井ほか, 1996)に基づき、1) 脂質の抽出、2) クロマトグラフィーでの測定、3) 測定データの解析を行う。

### (3) 結果

結果を第2表に示す。脂肪酸組成では、分析を実施した全試料でC16:0パルミチン酸、C18:0ステアリン酸、C20:0アラキジン酸、C22:0ペヘン酸、C24:0リグノセリン酸の比率が目立つ。ステロール組成では、壺棺内土壌では植物性ステロール(カンベステロール、ステイグマステロール、シトステロール)、壺棺底部試料で動物性ステロール(コレステロール)が検出される。

## 2-3. 考察

分析の結果、壺棺内部の土壌試料でリン酸・カルシウム含量とも最も高い値が得られた。壺棺内部のリン酸含量は、現耕上等の分析結果から推定される天然賦存量(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 大野ほか, 1991)と比較しても高い値である。これらの点から、壺棺内ではリン酸・カルシウムの富化が指摘できる。骨片と考えられる遺物が検出されていることを考慮すれば、何らかの動物質により富化している可能性が高い。

一方、脂質分析の結果では、壺棺内土壌(上層・中層・下層)では、脂肪酸組成で比率の日立ったアラキジン酸、ペヘン酸、リグノセリン酸は哺乳類の脳、神経、臓器に多く分布する高級脂肪酸であるが、ステロール組成では動物性ステロールが認められないことから、動物遺体の埋設を積極的に支持することはできない。これに対して、壺棺底部では上記の脂肪酸と動物性ステロールの比率が高く、動物遺体が埋設されていることが推定される。

以上のように、リン・カルシウム分析では壺棺内への遺体の埋設、脂肪酸分析では壺棺底部への遺体埋設の可能性が考えられる。このような結果は本遺構の性格を捉える上で興味深い結果となっており、当時の遺体の埋設の仕方などを反映している可能性がある。

なお、壺棺外側の土壌試料のリン酸・カルシウム含量は、壺棺に近い試料ほど高い。これは、周溝墓主体部のリン酸含量が埋葬位置で最も高く、埋葬位置から離れるにしたがって規則的にリン酸含量が減少する傾向(竹迫ら, 1980)とよく似ている。これらのことから、地下水などにより壺棺内の成分の一部が壺棺の外側にも流出している可能性もある。また、壺棺内土壌で高比率を示した高級脂肪酸の種類のうち、リグノセリン酸は現存する動物脂のデータで今回のように高比率を示すものは認められず、今後のデータ蓄積を待って再評価したいと考える。

## 3. X線回折分析による朱色物質の材質同定

### (1) 試料

壺棺内中層土壌に混在する朱色を呈する砂粒状物質である。

### (2) 分析方法

朱色の砂粒状物質をメノウ乳鉢で微粉砕(200メッシュ以下)した。これをスライドガラスに充填し、図2に示した条件でX線回折の測定を実施した(足立, 1980; 日本粘土学会, 1987)。物質の同定・解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム(五十嵐, 未公表)により検索した。

### (3) 結果

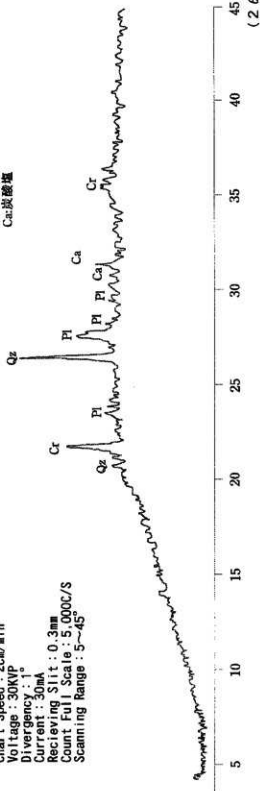
試料のX線回折図と検出鉱物を第3表に示す。試料中に石英(quartz)、斜長石(plagioclase)、クリストバラ

測定条件

装置：島津制作所製XD-3A  
 Target：Cu (K<sub>α</sub>)  
 Scanning Speed：2°/min  
 Filter：Ni  
 Chart Speed：2cm/min  
 Voltage：30KVp  
 Divergency：1°  
 Current：30mA  
 Receiving Slit：0.3mm  
 Count Full Scale：5,000C/S  
 Scanning Range：5~45°

検出鉱物略号

Qz：石英  
 Pl：斜長石  
 Cr：輝石  
 Ca：炭酸塩



第3表 壺棺中層から検出された赤色物質のX線回折表

イト (cristobalite)、炭酸塩鉱物が検出される。また、回折線のベースが $20-45^{\circ}$  ( $2\theta$ ) にかけて非晶質な酸化鉄化合物が確認できる。これらのうち、褐色～赤色を呈する鉱物は、酸化鉄化合物である。

#### (4) 考察

赤色顔料は、古くから用いられており、各地で出土例が報告されている。遺跡から出土する赤色顔料には、朱(辰砂)と酸化鉄化合物(ベンガラ)がある。特にベンガラの出土例は多く、土器・木器など身近な様々な製品に散布されている。

今回の試料は、土壌中に小さな塊として含まれており、色は肉眼で橙に近い。この状況と分析結果を考慮すると、赤色物質は酸化鉄化合物ではあるが、いわゆるベンガラのように精製されたものではない。酸化鉄化合物は、水溜まりなどで鉄分に富んだ沈殿物として普通に見られる。これらの沈殿物は、鉄バクテリアの活動により形成され、遺跡から出土した赤色顔料の中にも沈殿物を原料としているものがある(岡田, 1997; 降幡・沢田, 1997)。リン・カルシウム分析の結果では、成分が流出している可能性が指摘されている。このことを考慮すると、赤色物質は水などの影響で二次的に沈着した鉄化合物の可能性はある。

#### 〈引用文献〉

- 足立吟也(1980)「6章 粉末X線回折法 機器分析のてびき3」, p.64-76, 化学同人。
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。  
「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36. 農林水産省農林水産技術会議事務局
- Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学 一元素の循環と生化学一, 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen, H. J. M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壌の化学, 岩田進午・三輪晋太郎・井上隆弘・岡 捷行訳, 309p., 学芸出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235-236.
- 日本粘土学会編(1987)「粘土ハンドブック 第二版」, 1289p., 技報堂出版。
- 土壌標準分析・測定法委員会編(1986)土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社。
- 土壌養分測定法委員会編(1981)土壌養分分析法, 440p., 養賢堂。
- 森實 正(1979)カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52: 57-61, 地質調査所。
- 川崎 弘・古田 淳・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編(1987)農芸化学実験書 第1巻, 411p., 産業図書。
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準上色粘。
- 岡田文男(1997)パイプ状ベンガラ粒子の復元, 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p.38-39.
- 降幡順子・沢田正昭(1997)酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究, 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集 p.76-77.
- ベドロジスト懇談会編(1984)土壌調査ハンドブック, 156p, 博友社。
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄(1996)灯明皿の脂質分析, 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)第二分冊」, p.24-37, 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所。
- 竹迫 紘・加藤哲朗・坂上寛一・黒部 隆(1980)神谷遺跡への土壌学的アプローチ, 「神谷原1」, p.412-416 八土子市門田遺跡調査会。

## 第5章 総 括

### 1 はじめに

金の尾遺跡は、山梨県における弥生時代遺跡としては最大規模を誇るものとして知られている。しかし、今回の5次調査によって得られた結果は平安時代を中心とするものであった。

既に6次にわたって行なわれた調査結果も踏まえてまとめることとする。

### 2 縄文時代

縄文時代の遺構は発見されなかったが、遺物については若干の資料を得た。その大部分が調査区南側からの出土で、中期中葉から末の曾利V式の上器である。また1点工字文の先端が滴巻き状になった晩期の籾杵文の上器が出土している。

曾利V式土器と併伴して出土したのが遺構外遺物の26として報告した十製品である。形状などからペンダントなど装飾品として用いられた可能性が考えられよう。

金の尾遺跡において明確に縄文の遺構が発見されたのは1、3次調査である。いずれも遺跡範囲の南側での調査で、前期末の十三菩提式期や中期中葉勝板式期の住居、土坑が調査され、また、曾利Vや加曾利EIV式土器が遺構外遺物として出土している。土器出土地点は殆どが調査区南側の自然落ち込み部分より出土しており、5次調査結果は遺跡全体の様相に比例するものである。

### 3 弥生時代

今回の出土遺物の中でもっとも注目を集めたのが、調査区北側の4号土壌墓より出土した壺棺である。壺高46.8cm、蓋を被せた状態では50.8cmを測る大型のものである。弥生時代前期から全国的に見られる甕・壺棺と同類のものと考えられる。本県における弥生時代の壺棺を伴う土壌墓としては、北巨摩郡明野村の下大内遺跡、甲府市朝氣にある朝気遺跡、東八代郡中道町に所在する上の平遺跡の例が報告されている。

下大内遺跡では、長径124cm、短径101cm、深さ44cmの土壌より器高78.4cmの広口壺が立位の状態で出土している。口縁について、残存は少ないが一部出土をしている。壺内面の底部付近において焼土が認められ、また、少数ではあるが、2個体分の土器片が壺棺を覆う状態で出土している。弥生時代前期末から中期と位置づけられる。朝気遺跡からは第5次調査によって長径約90cm、短径約70cm、深さ約25cmの土壌から1縁を欠いた二つの壺が欠いた部分を合わせた状態で横位に出土し、棺内部からはガラス玉4個が発見されている。また、上の平遺跡からは81号方形周溝墓南側溝より壺棺が横位の状態で出土している。1つは口縁を欠いた壺で、この欠いた部分とこれにもう1つの壺の口縁部が重なる合わせ口壺棺である。両壺棺とも弥生時代末として報告されている。

弥生時代における埋葬法、特に棺を伴う形態には大きく複椀型壺棺再葬墓と単椀型壺棺再葬墓の2つに大別され、本遺跡の土壌墓は後者に該当する。中部高地では、弥生時代前期条痕文系土器の分布に伴い板、単の再葬墓が認められる。山梨県においては、出土事例が希少なためはっきりとしたことは今後の課題となるが、現在までのところ棺墓としては下大内遺跡の条痕文壺形棺を伴う第225号土壌墓がもっとも古くも占めて考えられよう。また、朝気遺跡や金の尾遺跡のように後期から末にかけての棺の形態には口縁を焼物によって覆うという蓋の役割が認められる。蓋付きについては縄文晩期に西日本で認められ、東日本でも弥生前期には定着したと考えられている。下大内遺跡とはほぼ同時期と考えられる埼玉県東松山市の西人遺跡からも条痕文の蓋に浅鉢を被せた状態の壺棺が出土している。本県における転用蓋等の出土例が後期以降に見られるのはたんなる調査件数の少なさなからくる傾向なのか、蓋付壺棺再葬墓の成立、定着の時間的差異によるものなのか今後の課題となる。

金の尾遺跡の棺は、本塚で明確に棺と考えられるものとしては4例目の出土となるが蓋に蓋を付けた形のもの  
は初例である。壺本体の口径が21cm、器高が50cm弱であることから成人の遺骸をそのまま埋納することは難しく、  
乳児もしくは幼児の埋納が考えられる。しかし、一旦遺骸を腐食させ埋納するといった再葬方法をとった場合は  
成人でも十分に納棺が可能であろう。

金の尾遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓が26基発見されている。今回の4号土墳墓の年代は土器などから  
弥生末と思われる。このことは方形周溝墓による埋葬方法が行われていた以後に壺棺を用いた土墳墓による埋葬  
方法が行われたことになり、棺墓から周溝墓へと移った東日本に一般的にみられる埋葬方法からは異なる事例で  
ある。方形周溝墓前後の墓形態については不明な点が多く、今回得られた資料は同時期の埋葬方法を研究するう  
えで貴重な提示となった。

また、周辺では弥生末の遺構が土墳墓以外確認されておらず、墓域圏と居住圏の区別が存在したのか、さらに  
調査研究が必要である。

#### 4 平安時代

金の尾遺跡においてこの時期の遺構は初例である。1、2号住居出土遺物は共に甲斐型土器編年のX期に該当  
し、3号住居出土遺物はIX期である。1、3号住居は隣接しているが、3号住居が1号より先行するかたちで存  
在していたことになる。また、遺構外遺物中、坏は9世紀後半、甲斐型編年のVIII期に位置するものが多く見られ、  
内黒土器については10世紀第2、3四半期のX、XI期に該当するものであった。

出土遺物から、金の尾遺跡5次では3区分される。その第1は遺構外遺物で、大部分が9世紀第4四半期のVIII  
期。第2は3号住居で、10世紀第1四半期のIX期。第3は1、2号住居で10世紀第2四半期のX期である。本調  
査区では、9世紀末から10世紀第2四半期まで細々ではあるが時間差なく、継続的に生活が営まれていたと考え  
られる。

また、9世紀末の遺構に伴わない遺物であるが、平成7年に調査を行なった敷島町松ノ尾遺跡においてもこの  
時期に該当する坏が集中的に遺構外から出土している。今回も調査区西側においてまとまって出土しており、共  
通性がある。この時期に坏を用いた何らかの行事が屋外において行なわれていた可能性が高く、今後の研究課題  
となる。

敷島町においては、南部荒川右岸の松ノ尾遺跡の調査によって10世紀後半から12世紀初頃にかけての大集落が  
存在したことが判明している。また、御岳田遺跡においても11世紀代の住居が調査され、平安時代は比較的安定  
した土地であったことが判明している。今回の調査結果によって、町最南端の低地においても9世紀末から10世  
紀中ごろまでの資料が得られ、平安前期以降広範囲にわたって生活が営まれていたことが確認された。律令体制  
から荘園制への移行期でもあり今後、盆地北西部における政治・経済・文化を解明する上で貴重な資料となる。

最後に、金の尾に安住の地を求め、永遠の眠りについでた古代人を今回の発掘によって調査の対象とし、1700有  
余年の歳月が過ぎた今日、平成に生きる私達と対面をした。古代を解明する上でさまざまな情報を与えてくれた  
古代人に対し、衷心より感謝をいたし、御冥福をお祈りする。

合 学

(註1) 墨書された文字については、判読不明であったが、現在行われている山梨県史編纂事業の古代部会文字  
史料調査の際、平川南氏よりご指示があった。

#### (引用・参考文献)

- 中山誠二 1987 『1の平遺跡』 山梨県教育委員会  
甲府市史編纂委員会編 1988 『朝久遺跡』『甲府市史史料編第1巻原始、古代、中世』  
鈴木孝之他 1991 『代正寺・人西 人西遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
設楽博巳 1994 『壺棺再葬墓の起源と展開』『考古学雑誌』79巻4号  
佐野 隆 1997 『下大内遺跡・屋敷添第2遺跡・中原遺跡』 明野村教育委員会



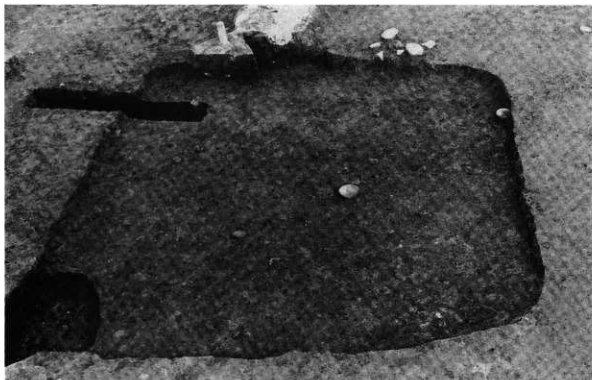




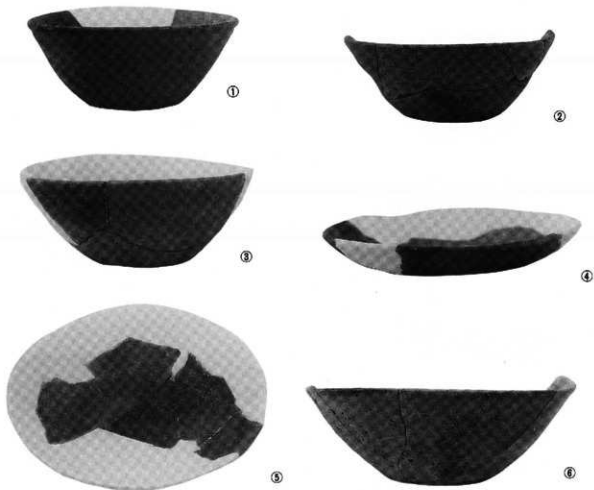
1号住居跡全景（西より）



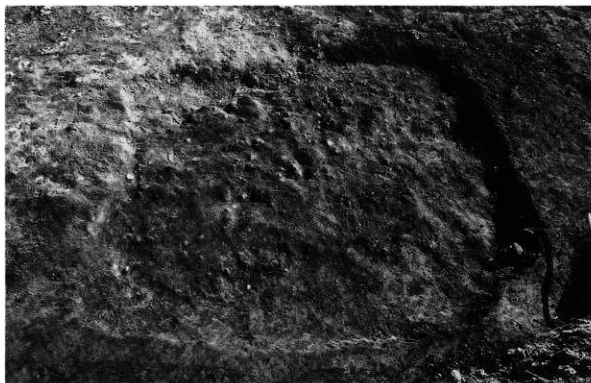
1号住居跡出土遺物



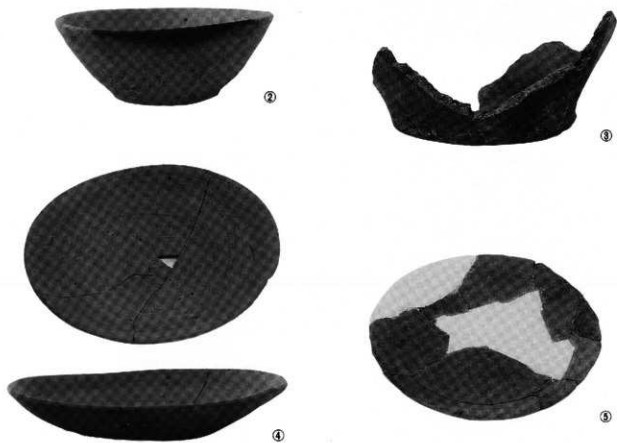
2号住居跡全景（南より）



2号住居跡出土遺物



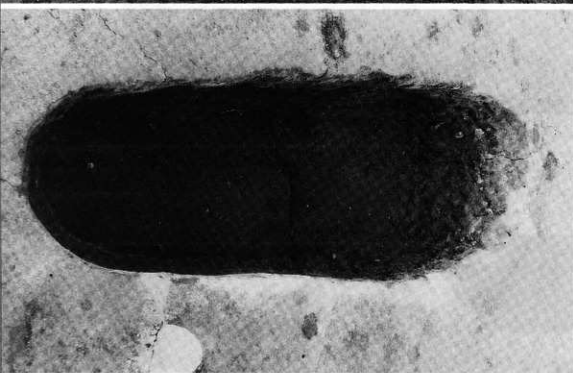
3号住居跡全景 (東より)



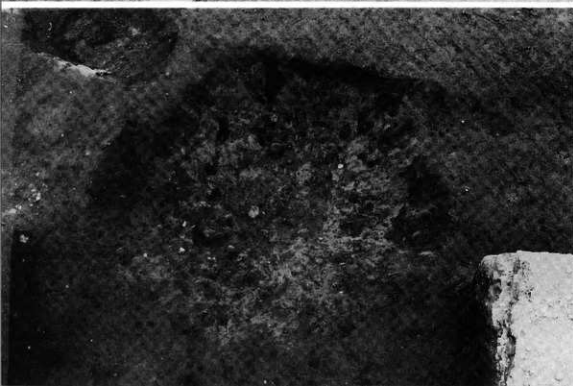
3号住居跡出土遺物



1号土坑（西より）



2号土坑（東より）



3号土坑（北より）



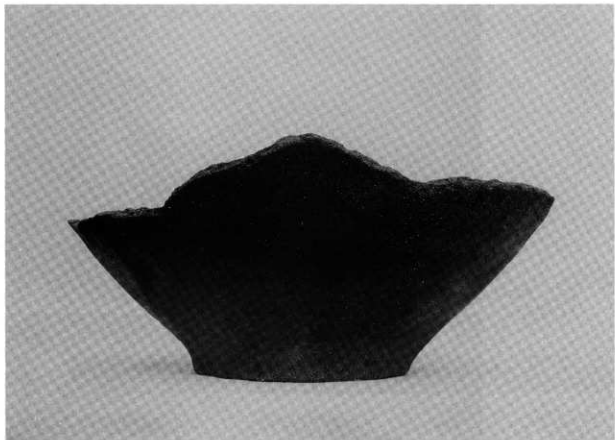
東より



南より



北より



壹 棺 蓋



壹 棺 蓋



4号土墳墓全景 (西より)



土墳墓底部踏石状況 (西より)



土墳墓完観全景 (南より)









25



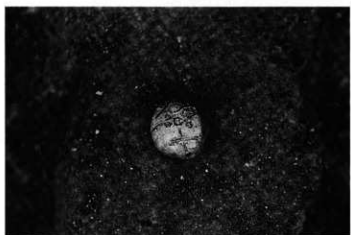
27



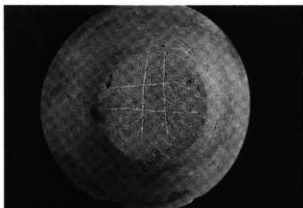
28



26

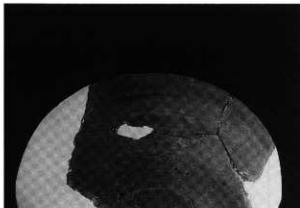


29



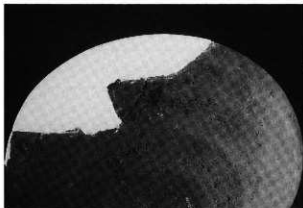
1号住  
NO1

「井」  
①



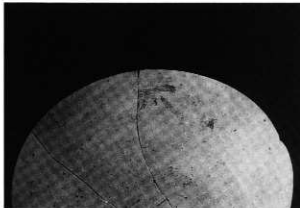
1号住  
NO5

「平」  
②



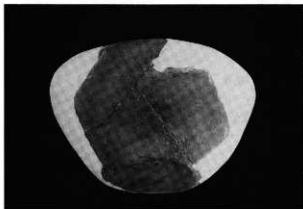
1号住  
NO6

「粟」  
「粟」  
③



3号住  
NO4

「六」  
④



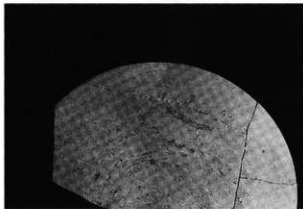
遺構外  
遺物  
土師器  
NO1

「平」  
⑤



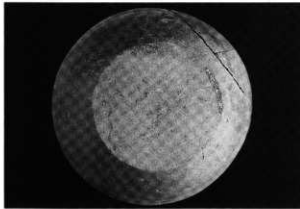
遺構外  
遺物  
土師器  
NO13

「九」  
⑥



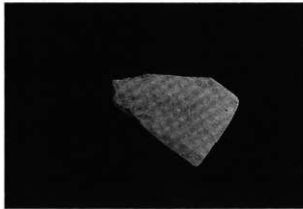
遺構外  
遺物  
土師器  
NO14

「人」  
⑦



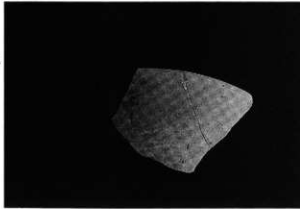
遺構外  
遺物  
土師器  
NO21

「ハ」  
⑧



B-4  
グリット  
一括

「平」  
⑨



F-10  
グリット  
一括

「平」  
⑩

# 報告書抄録

ふりがな	かねのおいせき							
書名	金の尾遺跡 V							
副書名								
巻次								
シリーズ名	数島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	6							
編著者名	大 嵐 正 之							
編集機関	数島町教育委員会							
所在地	〒400-01 山梨県中巨摩郡数島町島上条1020							
発行年月日	平成9年(1997)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
かねのおいせき 金の尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 数島町下条 475-1外	193828	6	35 39 58	138 30 7	平成8年 8月8日～ 平成8年 11月30日	2,200	町営泉尻団地 建設工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金の尾遺跡	集落跡	弥生時代 平安時代	住居跡 3 土坑 3 土墳墓 1	土師器 坏・皿 壺	弥生時代末の壺棺が出土。			

## 数島町文化財調査報告第6集

### 金の尾遺跡 V

発行H 1997年(H9)3月31日

発行 数島町教育委員会

印刷 イ ト ウ 印刷

山梨県中巨摩郡数島町下条920-1

TEL0552-77-8152

